

## 敬老精神

1987年9月14日 朝日新聞 夕刊 今日の問題

あすは敬老の日。だが、十分に手をつくされ、敬われているとは思えぬ姿で、この日を迎える人たちもいる。

たとえば一流動食用のチューブを鼻から胃に通され、さらに「いやがってチューブをはずそうとする」という理由で、腕をベッドに縛りつけられているお年寄りたち……。

他の方法がどうしても見つからないのなら仕方がない。

だが、食べものを飲みこめない人、水でさえむせてしまう人でも、調理法と介護法の工夫で口から食べられるようになることも少なくない。

神奈川県小田原市にある特別養護老人ホーム、潤生園の栄養士さんと作業療法の専門家たちが、工夫し実行している。

料理をミキサーにかけ水分を加えて、一人ひとりに適した柔らかさにプリンのように固める。お年寄りの姿勢を少し前に傾けて、この特別食を口に運ぶ。

レポートは普通食と同じくらい広い。ゴマや落花生をすって混ぜたり、たれをかけたりすれば味に変化がつく。「めん」がすすれない老婦人も、「寒天寄せそうめん」なら食べられる。

病院にいたら点滴か経管栄養になる人たちが、ここでは目を細めて味を楽しみ、次の食事を心待ちにする。

潤生園が開園して8年間に、「寝たきり状態」で病院からきた人は63人。

そのうち3分の2は車イスなどの助けで動き回れるようになった。床ずれつきで病院からきた24人は、ほぼ100パーセント治った。ぼうこうにカテーテルというチューブをさしこんで入園した18人は、残らずふつうに排尿できるようになった。

時田純施設長、椎野恵子栄養士の連名で書かれた実践レポートを読むと、行間ににじむ敬老の気持ちに胸が温まる。

たとえば、「隣の人のお食事まで食べてしまうAさんは、おなかをこわしやすいため1人用のテーブルで食べていただく」「歯のないYさんに肉丼を食べていただく場合……」。

潤生園では法定用語の「寮母」をケアワーカー、「生活指導員」をサーバントと呼ぶ。自分たちより人生経験の長い人たちに「母」だの「指導」だのと名乗るのは失礼だから、と。